山　563-1992・4・20

第 563 号 平成 4 年 4 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1992 年（平成四年）
4 月 号（No. 563）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

中高年登山対策全国大会……（1）
海外の山……（2）
「サガルマータ冬期南西壁ならず」
山研改築委員会報告『山研と資料室』
……（3）
東西南北……（4）
「JAC フォト・ビデオクラブが発足！」「ウエストンの斧頭氷杖」
「ブータン・ヒマラヤ登山料の改訂について」ほか
崑崙山脈国際キャンプ登山隊派遣説明会の案内……（5）
図書室だより（8），書籍・雑誌受入報告（2 月），日本山岳会所蔵山岳地図目録（5）……（6）〜（8）
図書紹介……（8）
「山岳俳句集　登攀者」「日本山岳紀行」
報　告……（9）
「自然観察・日だまり山行」「'92 年八方尾根懇親スキー山行」ほか
自然保護随想……(11)
会務報告……(12)
2 月定例理事会，ルーム日誌，山研・ナムチャ合同募金応募状況，新入会員（復活），住所・住居表示変更
お知らせ……(13)

**お知らせテープ電話**
**3234 六六五九**

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時〜20時
水，金曜　13時〜20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時〜20時

（大会風景）

## 中高年登山対策全国大会
# どうしたら解決できるか？ を深く掘り下げ討議

「中高年登山対策全国大会」が二月二十二日、東京・水道橋の東京グリーンホテル水道橋で開かれた。

文部省発行の『楽しい登山』によると、警察庁統計による最近五年間における、四十歳以上の中高年者山岳遭難者数の推移は、昭和六十年の二七八名（うち死者・行方不明者五六名）から、平成元年には四一六名（同一二二名）と急増、なかでも死者・行方不明者数が、五年間で二倍以上に達していることは、見逃すことのできない問題と指摘されている。

日本山岳会でも、会員の高齢化傾向は否めず、中高年登山者の安全対策について、その本格的対応に迫られていた。

このため、支部事務局担当者会議が開催されるにあたり、中高年登山を否定するのではなく、如何にその人達が安全に登山を楽しむことができるか、という見地から、事務局担当者、各支部、各委員会、三水会の山行企画・実施者が、この中高年登山者の安全対策についての事例などを持ち寄り、専門家講師を交えて、社会問題化している中高年登山者の抱える危険を、「どうしたら解決できるか？」を深く掘り下げ、討議する目的で、S・S・F・スポーツエイドの助成を受け、併せ開かれたもの。

大会には事務局担当者、各支部、各委員会、三水会から約八十名が出席、中川武支部担当総務委員が司会を務め、小倉茂暉総務担当常務理事の開会の辞のあと、挨拶に立った山田二郎会長は、「最近、中高年齢層の入会者が多い。シシャパンマ、チョ・オユー登山など熟年パワーも健在だが、未経験の中高年者が山に登るようになった。これらの人びとに対し、教育・指導を通じて、正しい登山の啓蒙、健全化を図ることが必要で、この大会ではあらゆる角度から討議していただきたい」と述べた。

続いての講演は、次の三氏から行われた。

●浦井孝夫文部省登山研修所長

高齢化社会に加えて、生活のゆとりなどから、六十−七十代のスポーツ人口が増えている。登山もこの分にもれず、そのため経験の乏しい中高年者の事故が増えているので、これが対策が急務と考える。

文部省としては昨年九月、『中高年の楽しい登山』を刊行、今年度は岩手、岐阜、高知の三県で、中高年安全登山講習会を開催する。対象は①教育委員会職員②日本山岳会、日本山岳協会などの指導者③地域・職域グループの代

表者で、この講習会を通じて末端への波及効果を期待している。

中高年登山者の実態をみると、いわゆる初心者に問題が多く、事故原因も観光気分で入山する、計画のずさんさがあげられる。これらの対策は、日本山岳会、日本山岳協会などと、行政が一体となってやらねばならない。また現在ある中高年の未組織登山グループの把握や、組織グループづくりを推進することも必要だ。

●小倉董子朝日カルチュアーセンター「女性のための山歩き教室」講師

山歩き教室の参加者は、まず早く山に登りたいということを考えるのが一般的。しかし講座のカリキュラムでは、装備、健康管理、地図の読み方、気象、動植物の観察に至るまで習得させ、山に入っても、歩き方、休み方、水の飲み方、バテない方法を実際に会得してもらうことに務めている。

とかく中高年者は自己中心主義で、他人の面倒はみたくない。この考えを正すため、仲間との山登り、リーダーとしての体験を積んでもらう。この結果、前日に地図・気象を読み、メンバーのことも考える自覚が生まれると同時に、山のこわさも知ることになった。

とかく男性は女性を甘やかすが、これでは女性の自立はない。時と場合によっては厳しくすることが必要だ。

# 海外の山

## サガルマータ冬期南西壁ならず

「ヒマラヤの自然を守るテイクイン、テイクアウトの実行」と、計画書の第一ページに書かれている。

次いでその趣旨として「HAT—J（ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト）の精神と活動に賛同し、余分な物は持ち込まず、本登山隊が物は可能な限り持ち帰り、ベースキャンプ周辺にある過去の登山隊のゴミを清掃します」とある。

九一年十二月から九二年二月にかけて群馬岳連が実行した冬期サガルマータ（エベレスト）南西壁登山。登攀だけでなく、スタート当初から環境問題を意識しての試みが注目されていた。

寒さと風が厳しいのが冬の特徴だから、初めから酸素ボンベを使う登山だった。

しかし、冬の風が、これほど強く、途切れることなく吹き続けるとは予想していなかった。

十一月二十日にベースキャンプから荷上げ開始。十二月二日には南西壁下六千五百㍍地点にCⅡを建設、直ちに上部ルート工作を開始した。

速攻が、八木原圀明隊長、尾形好雄副隊長らの作戦だった。六千九百㍍にCⅢ、七千六百㍍にCⅣをハイピッチで建設、十六日には八千三百五十㍍地点に達した。

困難はこの後に始まった。

「短期決戦」の筈が、連日風が吹きまくって行動がとれなくなったのだ。

「風と落石と寒さ。この三つの対策を考えていたんですが、落石などよりとにかく風が問題だった。夜中でも何でもやむ瞬間がない」と八木原隊長。

テントのポールとして準備したフレームが風にあおられ設営できないこともあった。

登攀ルートは、一九七五年に南西壁を登ったクリス・ボニントン隊のものとほぼ同じだったから登れない所ではない。

CVを、八三五〇㍍の最高到達高度に構え、一気に頂上を狙ったが、風は収まらず待ちに待ったあげく、結局時間切れで撤退した。

最上部のテントは、再度攻撃するつもりで撤収できなかったが、使った酸素ボンベは、ほとんど下ろした。

冬期南西初登頂は成らなかったものの、テイクアウト精神は立派である。「無論山をきれいに、という気持ちはありましたが、同時にボンベは充塡できるものでもったいないという、経済的な理由もありますよ」と、隊長は言っているが。

ところで、群馬岳連には、サガルマータ登頂者が五人、延べ八人いる。今回も三人が参加した。これだけの隊を編成できる県はあまりない、と思われるが、一方でマッキンリーから帰らなかった山田昇のように、優秀な登山家を失ってもいる。

「今回の隊にもいますが次代を育てるために、私はいつも何人かは初心者を連れていく。必ず次の登山でいい仲間になれると思うので」

そういう八木原自身は、八五年秋、サガルマータの頂上に立っている。当時ちょうど延二百人の登頂者が誕生したのだが、七年後の今は、目下三百九十一人、もうすぐ延四百人を越すだろう。

（江本嘉伸）

海外の山

人間は頑固、意固地の性格を持っているが、中高年になるとそれが激しくなる。例えベテランといわれる人であっても、過去の栄光を忘れ、現在の体力にあった山登りをすべきである。

●大森薫雄神奈川県立厚木病院副院長

中高年齢層は体力がどんどん衰えていくのが特徴。まず足の衰え。気力と体力のバランスがくずれる。疲労が早く、回復に時間を要する。この結果、転倒、滑落による捻挫、骨折が多い。このため日常のトレーニングが必要だ。効果的なのは早歩き。これは心肺機能を高める、血液の循環をよくし血圧を下げる、動脈硬化・糖尿病を予防する、肥満を防止する、脳を刺激して機敏性を富ませる、骨を丈夫にする、などの効果に秀れる。

と同時に、日常のメディカルチェックをおこたらず、①心肺機能疾患②肝・腎臓の持病③リューマチなどの関節疾患④高度の高血圧症⑤重度の貧血症⑥てんかん発作⑦気管支ぜんそく⑧主治医から登山を控えるようにいわれた人、は登山をすべきではない。

休憩をはさんで、坂本正智総務委員より、「中高年登山に関するアンケート」の回答と集計結果報告のあと、片岡泰彦指導・遭難対策担当理事から、「遭難対策委員会として昨年、冬山遭難を考える講習会を開催したが、今後も、会員の遭難に対する関心を高める活動をしていきたい」との発言があった。

三時間強を費しての討論では、各支部、三水会からの質疑、講師からの応答や、実例を基にした数々の問題提起がなされ、なかでも携帯無線機の有無、リーダー保険には関心が集まり、リーダー保険については、入澤郁夫集会担当理事から日本山岳会が加入しているそれについて、詳細な説明があった。

討論を終え、藤井正彦総務担当理事が閉会の辞を述べ、内容の充実した、実りの多い大会を終了。その後、席を改めての懇親会も開かれた。

この「中高年登山対策全国大会」はアンケートも含めて会報紙上に発表されることになっているので、あえてタイムスケジュールを追っての概要のみにとどめた。

（写真・坂本正智／文責・高田眞哉）

## ナムチャバルワ峰登山　上高地山岳研究所改築　合同募金に協力しましょう！

## 山研改築委員会報告

## 『山研と資料室』

新緑が美しく萌える四月二十六日（日）、沢渡のゲートが開かれ、今年も上高地は私達を心よく迎え入れてくれるに違いない。会員の皆様に支えられ、計画されて来た山研改築もいよいよこの日、地鎮祭を迎えることになりました。

あと半年、出来上るのを心待ちにしていらっしゃる方も多いと思います。そして、この秋、ナナカマドがまっ赤に染まり、吊尾根がかすかに雪を冠る頃、第Ⅲ世代の山研が鮮やかにデビューすることでしょう。さて、そんな形でオープンする山研も以前の建物と大きく異なる点が一つあります。それは地下一階に資料室が設けられることです。（会報五四九号参照のこと）

ご存知のように、会には数々の貴重な山岳資料が数多くあります。これらの資料を展示して一般にも公開し、まさに本会が目的とするる山岳に関する知識の普及、健全な登山の指導に資したいと考えております。今回、開設される資料室は、冬季閉鎖という前提があるため、常時展示するものはある程度の条件付のものとなりますが、多くの方々の意見や他博物館等の陳列内容等も参考にしながら決めることになることと思います。

これまで、ピッケル、アイゼンといった用具や、絵画、地形図といった山登りに関する歴史的な資料が、会員および関係者のご協力で数多く収集されながら、会独自で一堂に展示する場所がなかったため、大町山岳博物館、松本アルプス山岳館、神宮の秩父宮記念スポーツ博物館、六本木のスイスアルプス博物館などに寄託して展示保管して頂いているのが実情でした。（会報五五三号参照のこと）

今回、本会としては初めて一般への公開を、従来の寄託方式と併行で行うことにする訳です。一般公開となると、資料の選定、管理等といった新たなテーマが出て来てはいますが、この秋のオープン迄には多くの方々の意見を参考にしながら決めていきたいと考えております。上高地にふさわしい資料を数多く陳列します。是非、ご覧下さい。山研資料室をステップとして今後はさらに、九〇、一〇〇周年という節目に当会を母体とした「山岳博物館」

設立が可能となるよう進めたいと思っております。

（山口俊輔）

## JACフォト・ビデオクラブが発足！

山の楽しみ方がさまざま。山に行けば、誰しもがカメラを持ち歩き、写真を撮って楽しむ人が増えて来ました。また、ビデオカメラも普及し、身近にあふれています。

写真やビデオには「撮る楽しみ」『見る楽しみ」「見せる楽しみ」があります。そんな楽しみをさらに充実し、素晴らしい山岳写真やビデオを作ってみませんか。

フィルム・ビデオ委員会ではカメラ好きの会員の要望に応え、JACフォト・ビデオ　クラブを四月一日に発足させました。どなたでも随時入会出来ます。山岳写真やビデオワークの入門から実技・展覧会・講評までプロおよびベテランが指導します。申し込みは「はがき」にて、日本山岳会フィルム・ビデオ委員会内「JACフォト・ビデオクラブ」宛。「申込書」と「規約」をお送りします。

フィルム・ビデオ委員会

## ウエストンの斧頭氷杖

田畑真一

題名にあげた斧頭氷杖とは、おわかりいただけるだろうか。まだ、日本人にはピッケルが知られていなかった時代である。であれば、ピッケルと言う言葉も知られず、だから、斧頭氷杖となる。頭部は斧のようで、氷雪地に足場をきざむときの杖とでも説明できようか。それにしても日本人的な発想である。

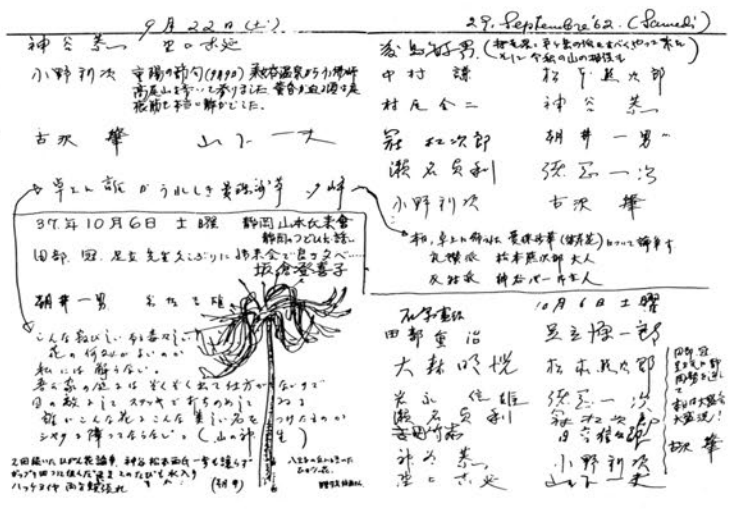
さて、明治四十五年五月、日本山岳会の第九回有志晩餐会が開かれた。関係記事には「此日別室にはウエストン氏登山用の斧頭氷杖等を陳列し」（『山岳』第七年第一号）とある。時代が下って八十年、平成二年の年次晩餐会では、秩父宮殿下と槙有恒旧蔵のピッケルなどが展示されていた。晩餐会にピッケルなどの展示品。しかも旧蔵者はウエストンと交遊関係にあった。一脈通じ合うものが感じられてならない。

ところでウエストンのピッケルであるが、その資料性については小島烏水も見解をあげ「ウエストンが、日本を去るとき、当時の滞留外人の、誰もがするように、不用品を競売に付した、その中に、あのピッケル（田畑注、ウエストンのピッケル）が交っていて、人手（外国人）に渡ったということを、後で聞いて、私は口惜しかった、恐らく、日本アルプスを踏破した記念のピッケルであったろうに、何故購入しておかなかったかと、今に及んで悔いが長い」（ウエストン『日本アルプス－登山と探検』）と述べたことがある。大木操が上高地で撮影した（大正二年八月）ウエストン夫妻と学生たちの写真がある。この写真のなかでも、ウエストンはピッケルを手にしている。

どこへ行ってしまったのか。ウエストンのピッケルは。ただ、嘉門次小屋（上條輝夫氏）には、ウエストンから贈られたと伝わる別のピッケルがある。古典的なスタイルであるが、それだけに歴史を感じさせる。私はこのピッケルの写真を眺めている。ふと、ウエストンのほほえみも伝わってくるかの思いをもった。

〈別記〉先人のご芳名については敬称を省くことによって敬意を表しました。

△　△　△




古い（昭和37年）土曜会名簿（神谷量平氏寄贈）

## ブータン・ヒマラヤ
## 登山料の改訂について

三月二日に来日された、ブータン商工省観光行政局イシ・ノルブ局長から伝えられたところによると、この度の改訂では、一九八三年に策定された登山規則の中、登山料が左記のように値上げされたこと、一隊当りの入山人員が十六名と明示されたことで、同時に撮影取材料に関しても改訂されている。

なお指定された十三のトレッキング・コースの場合は登山料は不要であるが、このルートの途上で六〇〇〇㍍以下のピークを登る場合には三〇〇〇㌦が加算される。

| 高度 | 未登頂の山 | 既登頂の山 |
|---|---|---|
| 7000 m 以上 | US $25,000.- | US $20,000.- |
| 6501~7000 m | US $20,000.- | US $15,000.- |
| 6000~6500 | US $15,000.- | US $10,000.- |
| 6000 m 以下 | (US$ 3,000.-) | |

（注）撮影取材料…1隊当り US $10,000.-
（資料…マルコポーロ・ジャパン提供）

## 崑崙山脈国際キャンプ
## 登山隊派遣説明会の案内

**海外連絡委員会**

前号ですでに崑崙国際キャンプの内容が記載されましたが、この国際キャンプに参加する登山隊（団体もしくは個人）を募集いたします。参加希望者の準備（説明）会を別記の通り開きます。

計画の基本内容は次の要領です。

一、山名
　玉珠峰（カカサイジモンカ）周辺のピーク
一、期間
　六月二十日～七月二十日のうちの十六日間（例、六月十九日～七月五日）
一、参加人員
　十五名～二十名
一、参加費
　見積依頼中（四〇万円前後）

青梅省登山協会への申込みの関係で左記要項にて準備説明会を開き、計画の最終立案をしたいと考えます。

一、準備説明会
　五月十二日(火)午後六時三十分
　日本山岳会会室
◎出席希望者は①住所、②氏名、③連絡先電話およびＦＡＸ番号④ご意見記明の上左記へＦＡＸして下さい。
　日本山岳会海外登山委員会宛
　〇三－三二六一－四四四一
一、連絡先
　神崎忠男　TEL〇三－三四七八－三九八一
　FAX〇三－三四〇二－五九五八

## フォン・レルヒの
## スキー登山

久保田　全

テオドール・フォン・レルヒ（一八六九－一九四五）が、高田第十三師団歩兵第五十八連隊のスキー専修将校など十四名に対して、スキー術の訓練を開始したのは、明治四十四年（一九一一）一月十二日のことであった。

第十三師団スキー演習実施表によれば、一月十二日から三月十二日まで三十四回、延べ二十四日半の演習を実施、この間、軍隊から民間へとスキー術は急速に広まっていく。山岳の登降を主要なねらいとするリリエンフェルト・スキー術は、わが国のスキー登山史に大きな影響を及ぼすことになる。来高初年度（明治四十四年）におけるレルヒのスキー登山の足跡をふり返ってみよう。

①第十三師団策定のスキー術応用演習科目には、吹雪に対する行進法、山地行軍、雪崩多き高山登降法、濃霧中行進法などがある。二月十二日、レルヒと専修将校の一団は、応用演習の一環として高田郊外の南葉山（九四九㍍）を目指したが、荒れ狂う風雪に阻まれ、頂上を目前にして下山のやむなきに至った。

②四月十三日、快晴。レルヒと高橋翠郊は南葉山頂にシュプールを刻むことができた。高田新聞記者高橋翠郊は、狩猟をとおしてレルヒと親交を結び、スキー術習得後の大正三年（一九一四）一月、スキー史上初の犠牲者を出した富士スキー登山隊に、副隊長兼写真係として参加している（『山岳』九年一号参照）。大正八年、『スキー家に』を刊行。金井勝三郎と並び民間スキーの隆盛に尽くした先駆者であった。

③四月十六日、レルヒと友人クラッツァーは、二人の強力を連れて、太郎坊から富士スキー登山に出発する。日本駐留のため、横浜入港の船上からながめた富士山は、レルヒに強い印象を与えていたのだ。

高山病の症状を呈したクラッツァーは八合目に残留、レルヒと一人の強力は九合目まで到着するが、ここで強力はリタイア、迫りくる日没のためレルヒも登頂を断念せざるを得なかった。

④「スキー専修将校、大尉鶴見亘信、

中尉松元利彦、同高橋良、少尉木暮広三郎らの一行は、レルヒ少佐を隊長として、五月十三日、高田を出発。十四日、燕温泉から妙高山スキー登山を開始、スキーの着脱を繰り返しながら、苦闘六時間で頂上に達した。ところが、下降に際してアクシデントが発生する。松元中尉が谷底へ滑落したのである。

五月十九日付高田日報は、「妙高の絶頂より千仞の渓谷に墜落す　五十八連隊スキー研究委員の奇禍」の見出しで次のように報じている。「頂上は寒気強く雨は吹雪となって降り注ぎ、脚下には雲湧き咫尺弁ぜざるの光景と変ぜしため、研究員の一名は誤って崖上より脚を失して遂に妙高の絶頂より渓谷深く墜落したる。生命はとても覚束無しと一行の驚き一方ならざりしが、不思議にも一命助かり一同と共にめでたく帰高せりという。（以下略）」。

レルヒも『明治日本の思い出』の中で、この登山について言及し、「苦しかったツアー」と言っているが、コースタイム、墜落地点等は必ずしも明確ではない。一行は全制動滑降で燕温泉に出て、午後八時三十分、高田に帰着、酒杯を傾けて無事を祝し合ったのである。

故国を遠く離れたレルヒは、時に孤独に陥ることもあったが、それを慰めるものは、「マウント妙高の英姿、雪に包まれた高田の町、小川のせせらぎ」（「レ少佐訪問記」明44・1・16、高田日報）などであった。

## 図書室だより (8)

▼Berg '92 が届きました。ドイツ山岳会とオーストリアの山岳会で年に一度共通に発刊する年報です。現在の名称は Berg ですが、一九七〇年から一九八三年までは Alpenvereinsjahrbuch と記されており、その前は Jahrbuch として同じ内容のものがドイツ（ミュンヘン）とオーストリア（ウィーン）で別々に発刊されていました。さらにその前（戦前）は Zeitschrift の名がつけられていました。そもそもこの両国の山岳会は東アルプスという共通のホームグラウンドを持ち、創立もほぼ同時期で、組織の在り方が両者とも「クラブ」ではなく「連盟」であったので合同し、ドイツ・オーストリア山岳会という一つの組織になり、共通の年報を作っておりました。しかしヒトラーの時代に限ってはオーストリアはドイツに併合されてドイツ山岳会という名称に変わりました。そのドイツ山岳会は敗戦により姿を消しましたが、オーストリア山岳会はすぐに復活しました。一九五〇年にドイツ山岳会も復

### 書　籍・雑誌　受入報告　1992年2月

| 著　者 | 書　名／雑誌名 | 版型・ページ | 出版元 | 出版年 | 寄贈／購入別 |
|---|---|---|---|---|---|
| Frank Kingdon-Word | HIMALAYAN ENCHANTMENT | 240×162／245 PP | Serindia | 1990 | 購　入 |
| Hamish MacInnies | THE PRICE OF ADVENTURE | 222×145／192 PP | Mountaineers | 1987 | 購　入 |
| Mike Strassman ed. | CLIMBING BIG WALLS | 228×150／115 PP | ICS Books | 1990 | 購　入 |
| B. Washburn, D. Roberts | MOUNT MACKINLEY | 311×274／206 PP | Harry N. Abrams | 1991 | 購　入 |
| Lewis Freedman | DENGEROUS STEP | 227×150／200 PP | Stackpole Books | 1990 | 購　入 |
| Glenn Randall | BREAKING POINT | 227×150／135 PP | Chockstone Press | 1984 | 購　入 |
| Will Steger | NORTH TO THE POLE | 242×165／339 PP | Times Books | 1987 | 購　入 |
| Lincoln Hall | THE LONELIEST MOUNTAIN | 280×218／232 PP | Mountaineers | 1989 | 購　入 |
| Reinhold Messner | ANTARCTICA Both Heaven and Hell | 230×150／383 PP | Mountaineers | 1991 | 購　入 |
| John Roskelley | LAST DAYS | 234×160／211 PP | Stackpole Books | 1991 | 購　入 |
| Richard Goedeke | THE ALPINE 4000 m PEAKS | 197×118/240 PP | Menasha Ridge | 1991 | 購　入 |
| 日本気象協会 | 平成三年　夏山の気象観測表 | B 5／209 pp | 日本気象協会 | 1991 | 発行者寄贈 |
| 栃木県高体連中国登山委員会 | 慕士山初登頂 | 265×187／159 PP | 同登山実行委員会 | 1992 | 発行者寄贈 |
| DÖAV | BERG'92 | 265×215／304 PP | DÖAV | 1992 | 発行者寄贈 |
| 千葉大学学士山岳会 | 千葉大の山 40年 | B 5×125 pp | 同山岳会 | 1992 | 発行者寄贈 |
| Himalayan Environment Trust | THE HIMALAYAN ECOLOGY & ENVIRONMENT | 272×210／82 PP | HET | 1991 | 発行者寄贈 |
| 都立神代高校山岳部 OB 会 | シルクロードに架ける虹－大竹重信追悼文集 | A 5／105 pp | 同会 | 1988 | 上北和夫氏寄贈 |
| G. Boy & I. Allan | SNOWCAPS ON THE EQUADOR | 312×235／192 PP | Bodley Head | 1989 | 購　入 |
| Fred Beckey | CASCADE ALPINE GUIDE 1 | 216×177／326 PP | Mountaineers | 1987 | 購　入 |
| Fred Beckey | CASCADE ALPINE GUIDE 2 | 216×177／379 PP | Mountaineers | 1989 | 購　入 |
| Fred Beckey | CASCADE ALPINE GUIDE 3 | 216×177／322 PP | Mountaineers | 1981 | 購　入 |
| R. J. Secor | MEXICO'S VOLCANOES | 214×139／120 PP | Mountaineers | 1990 | 購　入 |
| Garry Weare | TREKKING IN THE INDIAN HIMALAYA | 183×128／172 PP | Lonely Planet | 1991 | 購　入 |
| M. Dubin & E. Lucas | TREKKING IN TURKEY | 183×127／144 PP | Lonely Planet | 1989 | 購　入 |
| Jim DuFresne | TRAMPING IN NEW ZEALAND | 181×127／260 PP | Lonely Planet | 1989 | 購　入 |
| 小林経雄 | 甲斐の山山 | 四六版／358 PP | 新ハイキング社 | 1992 | 発行者寄贈 |
| 森田良雄（古川　脩編） | 大正の山登り | A 5／54 PP | 山路書房 | 1992 | 古川脩氏寄贈 |

活し年報も翌年から復活しています。

ドイツ・オーストリア山岳会の年報は、伝統的に登山記録と同等かそれ以上に研究記事が多く、山岳万般に亘る分野に及んでいます。さらにオーストリア山岳会が独自に作成した東アルプスの山岳地図（Alpenvereinskarte）が毎号付録として付けられているのも際立った特徴です。版型は一九八〇年より大型になり、写真を生かすためのコート紙は一九七一年より使っています。

Berg '92の記事の中で注目されるのは、W・ステファンが一九六〇年のディスティギルサール初登頂以来、スワート、ノシャック、シアカンリ、マッキンリー、アンナプルナⅣ峰、コミュニズム峰、そして一九八九年のヌンまで第一線で登り続けていた記録抄。フォトジャーナリストによるチベット報告一九九一年などは日本の山岳雑誌では取り上げられない内容と思われます。

▼岩登りからスポーツクライミングと呼名が変り、技術的、体力的な鍛練を経た上で、さらに安全も確保した上で従来不可能視されていた垂直を越える岩場（人工壁を含む）が登攀されるようになり、一つのジャンル（あるいは競技）を作っています。この様な流れは欧米、日本、韓国ばかりでなく他の

## 日本山岳会所蔵山岳地図目録　5　ヒマラヤ（2）

A官製　B個人、団体　aシリーズ　b単作　c付録　d概念図　eその他

| 分類番号 | 発行者 | 発行年 | 地図名 | | 縮尺 |
|---|---|---|---|---|---|
| A 3-1 a | Survey of Pakistan | 1986 | NJ-42/SE | Tirich Mir | 1：500,000 |
| A 3-1 a | do. | 1983 | NI-42/NE | Peshawar | do. |
| A 3-1 a | do. | 1983 | NJ-43/SW | Hunza | do. |
| A 3-1 a | do. | 1986 | NI-43/NW | Gilgit | do. |
| A 3-1 a | do. | 1985 | NI-43/SW | Rawalpindi | do. |
| A 3-1 a | do. | 1985 | NH-43/NW | Lahore | do. |
| A 3-1 a | do. | 1986 | NJ-43/SE | Khunjerab Pass | do. |
| A 3-1 a | do. | 1986 | NI-43/NE | Skardu | do. |
| A 3-3 a | 参謀本部陸地測量部 | 1942 | 71-D | Gurkha | 1：250,000 |
| A 3-3 a | do. | 1942 | 71-H | Gosainkund | do. |
| A 3-3 a | do. | 1942 | 71-L | Tingri Dzong | do. |
| A 3-3 a | do. | 1942 | 72-A | Birganji | do. |
| A 3-3 a | do. | 1942 | 72-E | Katmandu | do. |
| A 3-3 a | do. | 1942 | 72-I | Mt.Everest | do. |
| A 3-1 a | AMS　U-502 | 1963 | NI-43-13 | Mastij | 1：250,000 |
| A 3-1 a | do. | 1964 | NI-43-1 | Churrai | do. |
| A 3-1 a | do. | 1963 | NJ-43-14 | Baltit | do. |
| A 3-1 a | do. | 1963 | NI-43-2 | Gilgit | do. |
| A 3-2 a | do. | 1964 | NI-43-6 | Srinagar | do. |
| A 3-1 a | do. | 1963 | NJ-43-15 | Shimshal | do. |
| A 3-1 a | do. | 1963 | NI-43-3 | Mundik | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-7 | Kargil | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-11 | Anantang | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-4 | Chulung | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-8 | Leh | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-12 | Martselang | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-43-16 | Palampur | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NH-43-4 | Simla | do. |
| A 3-1 a | do. | 1963 | NI-44-5 | Shyok | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NI-44-9 | Pangong Tso | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NH-44-13 | Tso Morari | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NH-44-1 | Chini | do. |
| A 3-2 a | do. | 1963 | NH-44-6 | Nanda Devi | do. |
| A 3-3 a | do. | 1958 | NH-44-11 | Jumla | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NH-44-16 | Pokhara | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NH-45-13 | Jongkha Dzong | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NG-45-1 | Katmandu | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NG-45-2 | Mt. Everest | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NG-45-3 | Kangchenjunga | do. |
| A 3-3 a | do. | 1963 | NG-45-4 | Pari Zdong | do. |

アジア諸国も大いに関心を持っているようです。（「登山月報」二七四号）

ヒマラヤン・クラブのボンベイ支部の会報（Sahyadri Bulletin）三号はこのスポーツクライミングの流れを受けて、会員のこのジャンルに対する見解と、ウェスタンゴーツ山脈の残丘を対象として若者の間で行われているクライミングの活動を紹介しています。

（図書管理委員会）

## 図書紹介

### 山岳俳句集　登攀者

菅原達也著

本書は著者が八年前に出版した『氷河卓』につづく第二句集である。著者は本書の、あとがきで「…登山の価値もまた私においては、山を理想とした行動の中から生れる生命感の充溢である。そこには想像があり、漂泊があり、冒険がある。憧憬の内化は無限の世界を繋ぐ…私の登山志向は、より以上の生への欲求であると同時に、山なる自然の中にひたすら人間的情緒への反響と唱和を聴こうとする祈りにほかならない…」と述べている。山岳俳句は、山という大自然に夢と憧れを抱く作者自らの登攀によってこそ、清新かつ迫真力ある作品をなすことが出来るのは言うまでもないが、また登山登攀における状況、高揚した感情を追求し表現しようとする時…アルピニズムの感覚で、スポーツとしての登山を詠い山岳俳句の嚆矢とされる石橋辰之助句集『山行』昭和十年刊、がそうであったように、一句の独立性という伝統俳句の枠に納まりきらぬ連作形式に近づく宿命をもっている。著者菅原氏は筆者と同じ俳誌「馬酔木」によって俳句作者としての道を踏み出された、が間もなく尖鋭的な岳人としての道を踏み出された、が去ってゆかれ、現在も現役の岳人である。前著から洩れた作品にその後の収穫を加え三一二句として纏められたものが本書で、穂高燃ゆ・ウエストン祭・山さらば・牧神組曲・山の讃歌・単独行・等六章とし、登攀・縦走・幕営、等を中心に山の臨場感が伝わるように配列構成されている。

残照の風凍て重る背のザイル

ウエストン祭若き輪唱泉なす

ハーケンの音を穂高の惜春賦

多くの岳人に想い出の山行を蘇らせてくれる、手もとに置きたい楽しい一冊である。

一九九一年十月二十日　一八九頁

山と渓谷社刊　定価二五〇〇円

（小林碧郎）

### 日本山岳紀行

—ドイツ人が見た明治末の信州—

W・シュタイニッツァー著

安藤　勉訳

W・ウェストンが『日本アルプスの登山と探検』を一八九六年にロンドンのジョン・マレー社から出して以来、日本で登山をする外国人が増えたことは知られている。この本の著者のW・シュタイニッツァーもその一人で、一九一一年にもっぱら登山のためだけに来日し、帰国後、一九一八年にドイツでその紀行文を一冊にまとめ上梓している。それより前の一九一三年には、DOAVの機関誌にその山行記録を報告しているというので、当時としては本格的なドイツの登山家が槍、前穂、立山、妙高、笠ヶ岳、富士などに登ったわけだ。W・ウェストンの書いた『上高地温泉場（登山者の栞）』には一九〇五年以降、外国人の訪問者が急増したが、それについての記録は未登録だった、と書かれている。

大井庄吉に案内されて登った前穂高岳の記録では、それまで奥穂に登ったものはいない、と大井が言ってると書かれ、事実と相違する所もあるが、このシュタイニッツァーの本は、ウェストンの言う、欠落している記録の一つを補う点からすれば、それを補ってあまりあると思われる。

『日本アルプスの登山と探検』に負うところ大、とはいっても独壊山岳会の会員の体験記はウェストンのそれとは違った面白さがある。これは登山以外の、当時の日本人の風俗に関する著者の所見についても言える。

掲載されている上高地の清水屋と思われる旅館の写真も、ウェストンのものとは別のアングルから撮られていたり、上条嘉門次の写真も、格好は同じでもこれまでしばしば目にしているものとは違ったアングルの写真だ。その他にあるものも、一九一一年代の記録写真だ。

当時の日本の登山史に興味を持つ者にとって、この本は貴重な資料を提供してくれるだろう。

一九九二年一月十日　信濃毎日新聞社刊　定価一五〇〇円

（岡澤祐吉）

△　△　△

報告

## 自然観察・日だまり山行

# 大野峠から旧正丸峠へ

自然保護委員会

自然保護委員会では去る三月一日（日）に、恒例、年二回実施する自然観察山行を奥武蔵の古い峠を結んで行った。講師は田村説三委員、参加者は二十四名であった。

雨との予報が良い方にはずれ当日は晴、それぞれ八時五十分までに西武秩父線・芦ヶ久保駅前広場に集まった。受付をすませ早速、資料にもとずく田村委員の話に聞き入る。このあたりは今やすっかり人工林（杉林）に変ってしまったが、かつての自然林はモミ―アカシデ林、モミ―アラカシ林であり山稜付近一帯は草原であったという。

虚空蔵峠にて（小林碧氏撮影）

九時過ぎ山口委員をリーダーとし、後尾を黒沢自然保護委員という隊列で今日の第一目標地、大野峠を目指して出発、赤谷経由で山中に入った。しばらくで谷筋の道となり水場で憩う。そして最後はうす暗い杉林の急登となる。さすが「関東の吉野」といわれるだけあって見事な杉林である。この辺りは江戸時代から西川林業地といわれた所だという。喘ぎながら、しかし途中からゴミの散乱が目立ち、そこが自然保護委員会の山行だけあって、それぞれがゴミ袋をぶらさげての大野峠到着とはなった。

大野峠は既に奥武蔵グリーンライン上にあって車道であるが、山口リーダーは巧みにまだ残雪のある旧道（山道）を探して縫ってゆく。七曲り峠を通り本日の最高点カバ岳を過ぎ、適当な広場と日だまりを見つけて昼食となった。それぞれ楽しい昼食の合間には委員会からはおいしい甘酒が沸され、時ならぬ山中で俄か甘酒屋が開業され、大いに賑わった。食後は全員輪になって自己紹介では片岡会員が本日参加の最高齢とわかり、あと中高年登山者の話が続き笑いが起こる。田村委員の話はあたりの自然の説明と共にその要点は次の通りであった。

「土壌は昔の人たちがやったように上手にサイクルさせてゆけば有効に保全されてゆくが、その点いまのゴルフ場やスキー場の建設は異質で、自然保全とは逆行している。」

かくして一時間半の休みは瞬く間に過ぎ去り、次なる目標、虚空蔵峠へ。途中、岩稜の道もあったがほぼくだり一方で峠についた。ここも車道上でゴミの散乱がおびただしくとても拾い切れない大型のものまであり、あらためて車社会のモラルの低下が嘆かれた。ここで小林(碧)会員による記念撮影の後、再び木の階段の山中、次はサッキョ峠だが、途次好展望地ありここでも小憩。サッキョ峠は古い茶屋跡があり、往時の峠路だが、ここでは指導標の位置が違っているのが山口リーダーによって指摘された。

あと旧正丸峠、そして正丸駅へは全くのくだり道、のどかな梅の花さく里へでる。駅前で池田委員長の挨拶のあと解散、有意義だった山行の幕を閉じた。しかし、そのあと東飯能や池袋などで幾つもの反省会が開かれたという。

**参加者**　池田、中島(伊)、片岡、賀嶋、川上、大野、小林(碧)、松沢、田村、小野里、川島、成田、平山、牧内、穴田、小倉(厚)、梨羽、遠藤(光)、松本、麦倉、黒沢、渡辺、福島(幸)、山口(悠)

（小倉　厚）

## 九二年八方尾根

# 懇親スキー山行

昨年の八方尾根スキー集会は湾岸戦争直前の緊張感の高まる中、ビジターとして参加しましたが、今年は新入会員として参加しましたので、以下に報告いたします。

今年は昨年より五名程少ない三十七名、十二日の下山、入山各三名、延べ四十名の参加者を迎え、三日間快晴無風のとても冬期とは思われない天候に恵まれ、十名が唐松登行に成功した集会となりました。

第一日目（一月十一日）、ケーブル八方駅で遠田さんに出会い始発で兎平へ、前日より入山していた集会委員会メンバーのスキー滑降を見下ろしながらアルペンリフトを乗り継ぎ、八時四十五分八方池山荘に到着しました。快晴無風、朝食をとり荷物を指定の部屋に入れ、直ちに唐松往復スキー登山に出掛けました。午後四時前に八方池山荘に帰着、既に三十名程の参加者が到

着しており、部屋に戻ると小宴会が始まっていました。到着後スキーを楽しんだ者、丸山付近まで登った者等、それぞれ好天の一日を堪能した様子でした。六時三十分より夕食、七時より懇親会、集会担当入澤理事の挨拶に続いて各自自己紹介の後宴会に入りました。山の歌の合唱が始まる頃には、夜行の疲れか飲み過ぎからか部屋に戻り就寝する者も何名か。

第二日目、昨日申告済の八方尾根／唐松登行組の内、早発ちの者は六時頃には小屋を出発しました。唐松稜線は雲が出ていましたが、概ね晴天で相変わらず風はありません。午後には崩れると思いきや終日好天となり、一日中スキーを楽しむ者、ＪＡＣ特設スキースクールに参加する者、尾根筋を散策し写真撮影に専念する者と思い思いに一日を楽しみました。夕食後は七時から六組のチームに分かれての集会委員会ご苦心のゲーム大会、最年少十二歳から最年長七十五歳までの参加者の珍ゲームに、全員腹をよじり、またたく間に九時過ぎの終了時間を迎えました。その後も有志による懇親会は十一時過ぎまで続いた模様でした。

最終日、朝食後、鹿島槍をバックに山荘前で記念撮影の後解散となりました。直ちに下山する者、明治大学の山寮に荷物を置きスキーを楽しむ者、引き続き山寮に泊まる者とそれぞれ三日間の思い出を胸に再会を楽しみに別れていきました。私は昼まで黒菱周辺のゲレンデでスキーを楽しみ、山寮前の雪上特設バーでビール、ウイスキー、また入澤理事お手製のそばまでご馳走になり、集会委員会メンバーの継松さんとほろ酔い気分でリーゼンコースを下りました。最後に、今回ご苦労されました集会委員会メンバーの皆様に感謝いたします。

**参加者**　阿部恒夫、石光久仁子、井野千枝子、井上公利、入澤郁夫、川善市、川朋子、北村義男、清宮政蔵、久保孝一郎、久保なお子、久保三朗、小島広、小林碧、小松原一郎、近藤雅是、斎藤かつら、坂下悦子、坂下幸一、嶋崎晃一、染谷美佐子、田寺尚和、継松義彰、遠田栄、中尾多予子、中川尚、中条昌子、中村太郎、那谷宇一、三沢一三、南川金一、柳下棟生、薮田益資、矢野弓之介、山内敏亘、山口暁、山口俊輔、山口延子、吉田実、渡辺俊雄

（矢野弓之介）

## 三水会日だまり山行

# 奥武蔵・ユガテ

中保

例年二月になると、竹寺で精進料理を楽しむ会を行っている。しかし今年は、寒明けの前に降った雪のために、竹寺にはいることができず、行程を変更して、日だまり山行となった。

八日土曜日、午後一時西武池袋に集合したのは、男性六名、女性二名の八名であった。

一時三十分の飯能行の電車に乗り、飯能で乗り替え、武蔵横手にて下車。駅から北に向って歩く。天気は快晴。しばし杉林を歩くと、規模は小さいが風情のある滝にでた。この滝は、五常の滝と由来が書いてあった。そこから少し歩いたところの啓明荘という民宿にたどりつく。まだ日は高い。坂倉さんが、「今日はここ泊りです」との一言。そして、「今から面白い事を行いますので、少し力を出して下さい」ともいった。なにをするのか少し興味をもって、六名の男性が期待していると、今から餅つきをいたしますとのこと。早速に薪作り、釜に火をつける。私は子供の頃から、商売上、薪割り・釜たきはお手のものであったので、手ぎわよく仕事に取りかかる。民宿で用意された餅米は、釜にかかり、臼は掃除して、餅米の蒸し上がるのを待つ。

やがて餅米は臼に、杵は私で、手がえしは勝田さん。二人の呼吸がぴったりあう。杵音はあたりにこだます。他の四名も杵を持ってつく。餅もでき上り、二人の女性と共に、餅作りに精を出す。黄粉、大根おろし、小豆のあんこ。皆な、楽しみながらおいしく戴く。

翌日は、啓明荘をあとに、北向地蔵に向って歩く。ハイキングコースの拠点で、峠に小さな祠がたっていた。約三十分程下ると、ユガテの里に出る。ここは昔、高麗の人々が、静かに暮した里で、今は一軒屋だけである。我々をおばさんが迎えてくれる。大休止。昨日作ったお供えと、日本酒をなきご主人に捧げ、我々一同も甘い汁粉で食事をとる。ユガテの里には、ハイキングの人々が、ゆっくりとザックをおろして、日だまりを楽しんでいた。

我々もゆっくり楽しんだあと、東吾野に向って坂を下る。一度、あるお寺で休憩をとる。この寺は福徳寺という寺であった。いまは無住の寺であるが、屋根の曲線の美しい阿弥陀堂があり、荘重で気品のある寺であった。この寺から十五分も歩くと、東吾野の駅につく。東吾野から池袋に直行かと思ったら、途中飯能で下車、美しい川の流れを見て、そばをたべることにした。お酒はうまいし、そばもうまい店で、この辺の名物になっている櫟亭という店であった。皆んな身心共に楽しんで、飯能から池袋に向う。池袋で男性四名、反省して、夜の池袋で解散となった。

**参加者**　乾、勝田、川上(進)、小林

（碧）、坂倉、高田、滝沢、中の八名。

## マッキンリー気象観測報告会(上)

科学研究委員会

平成四年二月六日(木)午後六時半からルームにおいて、標記報告会が大蔵喜福委員によりビデオを使って開かれた。講演の概要は左の通りである。

一九八二年十二月エベレスト登頂後消息を絶った加藤保男・小林利明両氏の遭難、一九八四年二月マッキンリーにおける植村直己氏の遭難、および一九八九年二月マッキンリーで山田昇・小松幸三・三枝照雄氏が遭難した事件は、いずれも冬期高所における厳しい気象条件、とくに強風が原因と考えられる。

大蔵らの行った風洞実験によれば、人間の対風限界（起立限界）は一気圧の平地で三五㍍/秒であり、マッキンリーデナリパス付近では四三・八㍍/秒エベレスト頂上では五二・九㍍/秒となる。したがって高層気象のデータから推定される加藤隊遭難当時の七〇㍍/秒とか山田隊の三九㍍/秒では、頂稜を抜ける風は約一・三倍に加速されることと考え合わせて当然耐風限界を越していたことが予想される。しかも外気温は零下四〇度近くであった。

他方大蔵らカモシカ同人冬期エベレスト登山隊の経験によれば、BCでの気温や気圧が徐々に下った後、急に上昇を始めると、その数時間後から一日後位の間に、頂上で強風が吹き易いこと

【自然保護随想】

## 自然保護と開発のはざま

昨年、日本山岳会の自然保護全国集会が開催された新潟県新発田市の営林署から、前橋営林局の局内報ともいうべき「山脈」92新年号と「広報まえばし」が送られてきた。主な内容は国有林事業の意義を強調して、管内営林署の活動や、地域市町村と林業の共存共栄を目指すといったもので、造林と森林活用の必要性を訴えているが、そんな中に〝苗場ふれあいの郷づくり〟の公募で、平標山近くの国有林内に分収育林を兼ねた、総区域七十八㌶の別荘地開発が進められているという記事があって、いささかの疑問を感じた。

林野庁の運営が独立採算制というノルマを負わされている所為かもしれないが、国有林の伐採や林道造成等に関する、環境庁との業務協定は果して円滑なのだろうか。我が国はこうした面での先進国、例えばカナダ辺りの自然保護施策に学ぶべき点が、多々あるように思われてならない。

ところが、苗場山神楽ヶ峰の「天下之霊観碑」が折損したため、当越後支部が再建を手掛けることになり、昨夏は資材の運搬作業で何回か現地へ登ったが、完成の目途がついた頃、再建の実行委員長をお願いした室賀輝男県山岳協会長の提案で、荷上げの帰りは空身になるのだから、神楽スキー場のゴミを集めながら下山しようということになった。冬は美しい白銀の世界も、雪の消えた山肌は無味乾燥で、派手に着飾って滑り廻るスキーヤーの姿を幻のように思い浮かべながら、ポリ袋を手にしてリフト周辺のゲレンデに、彼等の残したゴミを探し歩いた。下の芝から五合目の和田小屋へ下るまでに、三十名ほどの参加者が拾い集めたゴミの袋は、同行した石材店の二㌧積みトラックに山積みとなったが、こうしたゴミ処理は全国各地のスキー場でも共通の悩みであろう。空缶やポリ容器、毀れたスキー部品等が散乱しているオフシーズンの現地を、スキー客に見てもらいたいものだと思った。

それにしても、かつては樅やオオシラビソの見事な原生林に覆われた山襞が、数十㌶も無残な丸坊主となり、リフトのケーブルが縦横に張り巡らされている光景は、異常としか言いようがない。苗場山麓は到る処にスキー場が造成されて、宿泊施設をはじめ地元町村に大きな潤いをもたらしているが、観光事業にとって、山の尊厳は一顧にも価いしないのであろうか。

近年は自然保護団体の動きが各地で活発となり、環境庁もそれなりの施策に腐心しているようであるが、大気汚染や水質汚濁の防止といった地球規模の環境保全が問題視される現代に対処するためには、環境庁が環境省か自然保護省に衣更えをして、さらに強力な行政を展開すべきではないかと期待している。また、登山者やスキーヤーがせめて協力できることは、山を楽しむ者の良識として、自分のゴミは必ず持ち帰り、山を汚すような行為は一切やらないと、自らを戒めることではあるまいか。

（佐藤一栄）

とも判って来た。このような相関をさらに確かめ、強風の予測に役立てることは、強風の実態を知ることと共に、登山の成否を決め、アクシデントをなくす上にも極めて大切であろう。

マッキンリー長期気象観測はこのような観点から、一九九〇年より、大蔵が主になり、科学研究委員会が後援して始められた。

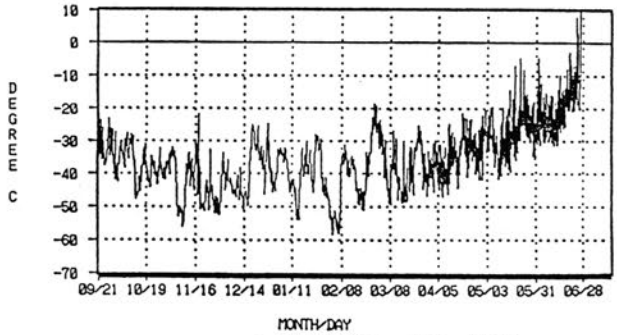
第一次観測機器設置登山隊は大蔵を隊長に、TV朝日の資金援助により、同年六月出発。六月十七日、マッキンリーデナリパス上部にある五七一〇㍍の岩峰上に設置された。ビデオに見られるようにセンサーは四本のアングル製支柱枠上部にセットし、これを径二㍉のワイヤー十二本でハーケンにより固定した。観測項目は白金温度計による外気温、プロペラ式風速計による風向と風速、雪中に埋めた記録装置の庫内温度などであった。

翌一九九一年六月、第二次登山隊が大蔵を隊長に自己資金で出発、六月二十六日装置を回収した。現地では強風のため先づワイヤーが二本切断され、その後固定用ハーケンが二本外れ、支柱枠が倒壊していて啞然とした。しかし帰国後記録装置は一年間作動していたことが判明、また倒壊は十一月二十二日に起ったことも判った。また切断されたワイヤーは突風がいろいろな方向から衝撃荷重を受けたための疲労破壊であることも判った。これは設置点がマッキンリー国立公園内にあり、固定法に制約を加えられた点に遠因があったものと考えられる。

図1は年間外気温を示すもので、-50度以下に下った日は十一月から二月にかけての計二十八日であり、最低気温は二月三日午前七時の-60度（補正前-58度）であった。図2はデナリパス外気温a)と、周囲の三測候所にけおるゾンデによる五〇〇mb（五七〇〇㍍相当）の気温b)とを比較したもので、相関はいいが、気温の値はマッキンリーの方が低い。これは観測高度（五〇〇mb高度）の差と地表温度の差などによるものと考えられる。

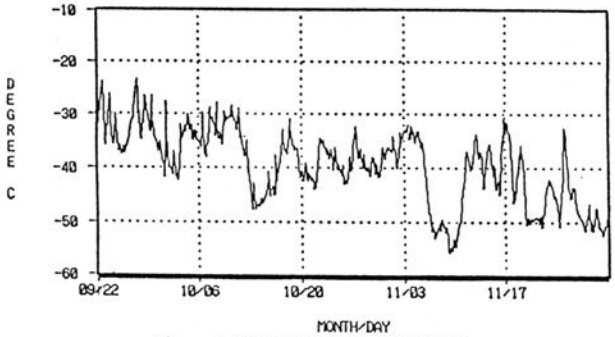
—続く—

（中村純二）

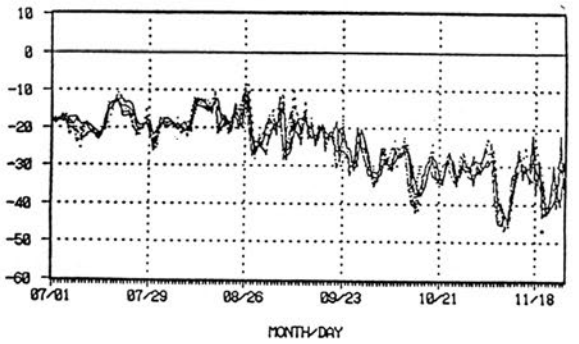



マッキンリー外気温度　(1991〜1992)

図1




a)　マッキンリー外気温度（測定周期30分）




b)　マグラス／フェアバンクス／アンカレッジ × (PM 4 h／PM 4 h) の外気温

図2

## 会務報告

**二月定例理事会**

二月十三日（木）十九時三十分〜

場所　日本山岳会会議室

**出席者**：山田会長、藤平、松田両副会長、小倉（茂）、大倉、大森、重広、小倉（厚）、入沢、穴田、石橋、伊丹、藤井、山口、山本各理事、中島監事、鴫原、橋本、西村、斎藤、湯浅各常任評議員

委任：神崎、関口、片岡、村井各理事、飯野監事

〔**審議事項**〕

一、第二次ナムチャバルワ登山の件

常務理事会で総隊長は山田、隊長は重広と決めたのでお諮りしたい。副総隊長の人選は両副会長と総隊長、隊長に一任ということでお願いしたい。

承認

二、平成四年度予算の件

三、アンタークティクウォーク隊名義

後援の件　承認

〔報告事項〕

一、募金状況　会員：一〇五八名で一九、三三〇、〇〇〇円
企業：申し込を含め四二、三三八、〇〇〇円

二、画家の後藤三男会員より新しい山岳研究所に作品（上高地からの穂高）が寄贈された。

〔委員会報告〕

自然保護：五月二十四日、二十五日に自然保護全国大会を京都で開催。六月十三、十四日はHAT—Jと清掃登山を実施。

山研：地鎮祭、上棟式、落成式を行う予定である。地鎮祭は四月二十六日（日）を予定。

女性懇：八月二十九、三十日に全国女性懇談会を奥多摩の御岳山で開催予定。テーマは女性の登山史。

資料：三田幸夫氏のアルバータの写真、およびマナスル事務局日誌を山田会長より寄贈を受けた。島田巽氏より三田氏旧蔵のアルバータの手紙類の寄贈を受けた。

植村直己記念館建設に先だって本年四月初より板橋区役所で展示会が開かれる。これについて協力依頼があった。

高所：二月八日に報告会、総括を行った。第二次隊の隊員と事務局員の募集広告を会報に載せた。

〔入会承認者〕

佐藤義廣氏他十四名。

## 次代に残そう美しい山と渓

## ルーム日誌

（2月）

3日　総務委員会
5日　青年部
6日　科学委講演会「マッキンリーの気象」
7日　図書委員会
8日　高所登山委員会「ナムチャバルワ総括」
10日　総務委員会
12日　集会委員会、アルパインスキー
13日　理事会
14日　山岳史懇談会「関西学院大学」
17日　総務委員会
18日　ビデオ鑑賞会
19日　三水会
20日　女性懇、青年部、科学委員会
21日　指導委員会
24日　資料委員会、シェルパを囲む会
25日　自然保護委員会

2月来室者475名

### 会員異動　2月

退会

山同陽一（九八〇七）
吉川仁育（八九五四）

物故

山田二郎（一一七六・永年会員）

2・3

宮入保徳（九四〇八）1・31

改名

清水治美（一〇七五八）→清水輝和子

### 山研・ナムチャ合同募金応募状況

（三月九日現在）

（七口）山口俊輔・延子、（五口）大橋克也、（四口）上野英世、小田眞道、金井健二、奥原廣次、（二口）乾好、陣内英一、貝森健治、高橋巌、高田允克、杉野目浩、大西康郎、田宮京子、岡本丈夫、角谷允孝、増田達治、関口令安、橋目茂、池田錦重、（一口）赤嶺辰男、安田範明、高橋重子、（一万二千九百三十円）集会・総務・女性懇委員会

（累計一千七十四名、三千八百九十五・六口　一千九百五十四万八千百二十九円）

### ◉平成四年度自然保護全国集会

本年の自然保護全国集会は、京都支部・関西支部のご協力を得て、次の通り開催いたします。

テーマは「山の環境破壊を考える—登山者および各種開発による破壊を如何にくい止めるか—」です。自然保護活動に、積極的に取り組む意志のある一般会員の方々のご参加をお待ちします。

**期日**　五月二十三日（土）～二十四日（日）

**会場**　滋賀県高島郡朽木（くつき）村麻生

**集合**　朽木・朝日の森　自然研修所
交通・JR湖西線安曇川（あどがわ）駅下車
五月二十三日十二時JR湖西線安曇川駅（バスで会場へ）。

**日程**　五月二十三日「朝日の森」で集会。五月二十四日Aコース・朝日の森自然観察。Bコース・比良山系武奈が岳登山（交通費別途要）。

☎ 3234-6659
この電話でもお知らせしています

**会費**　一万円（一泊三食、懇親会費等）

**申し込み**　宿泊予約等のため一般会員・支部会員とも五月十五日（日）までに氏名・会員番号・連絡先・生年月日（保険加入のため）また、山行希望等を記入しハガキで日本山岳会自然保護委員会へ。参加者には後日、詳細案内を送ります。　**自然保護委員会**

## ◉一九九二年越後支部親睦登山

浅草岳から鬼ヶ面山縦走と山菜共和国を訪ねて

**期日**　平成四年六月六日（土）～七日（日）

**集合**　北魚沼郡入広瀬村大白川新田五味沢

**受付**　音松荘（温泉有り）六日午後三時より受付

**コース**　七日音松荘（バス）＝桜尾根―前ノ岳―浅草岳頂上―鬼ヶ面山―六十里越（バス）＝大白川解散

**費用**　一一〇〇〇円

**申込**　五月二十日迄　日本山岳会越後支部宛

〒951新潟市営所通一　学生書房内

後日詳細のご案内をお送り致します。

**担当**　山田　勲

## ◉第十六回若葉会山行のお知らせ

本年の若葉会山行は、石川支部との共催で、白山千振（ちぶり）尾根に残るブナの原生林帯を歩き、新緑のブナの風情を味わっていただく計画です。

千振尾根は別山から派生している尾根で、白山御前峰を北東方向に眺める位置にあります。

計画の概要は以下の通りです。

**期日**　平成四年五月三十日（土）～三十一日（日）

**行先**　白山千振尾根（ブナの原生林を歩く）

**宿舎**　石川県石川郡白峰村『御前荘』電話〇七六一九―八―二二二四

**集合**　五月三十日（土）午前八時『御前荘』に集合。東京方面からは貸切バス一台仕立てます。

**食事**　三十日・昼食（弁当）夕食懇親会、三十一日・朝食、昼食（弁当）を用意いたします。

**行動**　三十日（土）午前九時御前荘を出発、市ノ瀬、千振尾根往復。午後四時御前荘帰着。懇親会。三十一日（日）午前九時三十分御前荘を出発、白山麓民族資料館を見学後現地解散。

**難易度**　一般向（尾根には残雪あり）

**会費**　一三〇〇〇円（現地直行の場合）東京からバス利用の場合は一二〇〇〇円位加算されます。

**申込**※現地直行の方は左記へ葉書（年齢付記）で申し込みの上、会費をお振込み下さい。

・織田伸治〒九二一金沢市光が丘二丁目二二九―七石往三―二〇四

電話〇七六二―九八―七二四二

・郵便振替番号

金沢一―一五〇〇九

日本山岳会石川支部

※東京からバス利用される方は、山岳会事務局気付集会委員会へ葉書（年齢付記）で申し込み下さい。詳しいご案内をお送りします。

**締切**　平成四年五月十三日（水）

バスは四十五名をもって締切らせていただきます。　**集会委員会**

## ◉講演会　山雲の機構と分類

（付遭難気象）

平成三年三月、山の気象研究会会長の大井正一博士は「登山に関する気象学の研究」により第二十七回秩父宮記念学術賞を受賞された。今回研究のメインテーマであった、吊し雲、滝雲などの流体力学的な説明や山雲の生成機構と分類、さらに遭難気象についての解説をスライドを用いて話して頂くことになった。多数のご来聴を歓迎する。

**日時**　五月八日（金）　午後六時半より八時半まで

**場所**　日本山岳会ルーム

**講師**　山の気象研究会会長大井正一氏

**『山岳』（一九九一年）訂正**

・九〇頁下段五行目　芳野孝郎→芳賀孝郎

・二〇二頁上段二行目　能楽→農学、同六行目　山田登→山田昇

・二五〇頁上段五行目　本田宏考→本田宏彦

・A二九頁九行目 uo→up, 同一二行目　could find→could not find, 同一三行目 glagiers→glaciers

・A三〇頁二四行目 specil→special

・A四五頁一八行目　武内亮→竹内亮

・英文梗概の中の中国の山名につきまして、中国語のローマ字による拼音表記か、英語発音による表記か、どちらかに統一し、その旨を注書きすべきでしたが、混乱がありご迷惑をおかけしました。

以上、訂正してお詫びいたします。　**『山岳』編集委員会**

**演題**　山雲の生成機構と分類（付遭難気象）　**科学研究委員会**

## ◉植村直巳とエベレスト展

「植村直巳とエベレスト展」を第一回植村直巳記念財団（仮称）の催しとして東京・板橋区役所内で開催します。ぜひご覧下さい。

※

・平成四年四月初旬～六月中旬
・板橋区役所一階　区民ホール
・一九七〇年ＪＡＣエベレスト隊と植村直巳の活動を展示します。

## ◉全国集会のお知らせ

八月二十九日(土)～三十日(日)
奥多摩・御岳山（宿泊・山楽荘）
女性登山史をテーマに全国集会を開催致します。

山岳会八十周年の折に出した発表をご記憶のことと思いますが、会員の中には女性登山史の調査を続けておられる方や、独自の視点で女性登山史をまとめようとしていらっしゃる方もありその方達を囲んで集会をしたいと思います。坂倉登喜子、小倉董子、梅野淑子、遠藤京子、児玉俊子の各氏等に出席をお願いしております。

宿泊所の関係上定員は七十名前後を予定し、超過の場合は女性会員優先とします。

**締切り**・七月十日女性懇談会宛葉書でお申込み下さい。

**会費**・九千円（予定）

**お問い合せ**・穴田雪江（朝九時前）
〇三・三九二五・五五三三
宮澤美渚子（夜八時過）
〇三・三三九九・三五一九

**女性懇談会**

**あとがき**◆会報『山』の仕事は、皆さんよりひと月先を進んでいます。三月既に四月号の作業で平成四年度入りです。

◆かなり徹底はしてきましたが、原稿の送り先は必ず左記へ。

〒338浦和市木崎5―15―8　小倉　厚

平成四年四月二十日発行
102　東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　山田二郎
編集代表　小倉　厚
電話東京(3261)四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂